

忖度は損得か？

福島伸悦

昨年のユーキャン流行語大賞の一つに「忖度（そんたく）」という言葉が選ばれました。聞いたこともなかった方が多かったようですが、本来の意味は、相手に寄り添って、相手の気持ちをおしはかることです。この言葉が使われるようになったきっかけは、森友学園・加計学園の問題、つまり国有地売買において官僚の安倍総理大臣に対しての「忖度」があったのか、なかったのかというのが国会で議論になり、連日テレビや新聞等で報道されたからです。この言葉の中に、様々な意図が込められているという事です。忖度する人の心は、自己保身欲求などの何らかの見返りへの期待が潜んでいます。悪い忖度がはびこる日本社会の根底に横たわる構造的な問題が存在することは否めません。

過日、私の中学、高校の先輩にあたる元厚生労働事務次官・元人事院総裁・江利川毅氏の講演を拝聴する機会がありました。江利川氏が国家公務員として大事に思って実践してきたことは、「志」をもって、忠恕の心で「人事を尽くして天命を待つ」のではなく「天命が受け入れるまで人事をつくす」というのだそうです。一生懸命やっているとおっしゃっていました。問題解決のための絶対的価値基準、つまり万事に対応できる心構えを身につけたいと勉強されたということです。そして、その答えが仕事に対する姿勢の根幹となるものは、「忠恕」という事だと悟ったとのこと。忠はまごころ、恕は思いやり、慈しみという意味です。「忠恕」も「忖度」も思いやることで、そこには損得勘定、打算的なことはなく純粹に相手に寄り添う事なのです。

言葉は違いますが、私の教えも他人への思いやりの心を持ちながら、世の中の為にあるいは他人の為に行動することが説かれています。そこには損得勘定や見返りを求めるようなことは絶対にあってはならないと明言されています。いい意味で忖度のある社会になればいさかいなどなくなるはずなのですが・・・